

台湾解剖学史——森於菟と金関丈夫両先生を中心に

哈は
鴻こう
潜せん

台湾での正式の医学教育は明治三十二年（一八九九）台湾総督府医学校の設立に始まる。医学校が創設されたとき、専任教官が少く、殊に基礎医学担当の先生が皆無の状態であった。解剖学と病理学は台北病院の外科医長川添正道が兼任したが、その後間もなく専任教授として大阪から田中祐吉（病理）が就任した。明治三十五年（一九〇二）尾見薫が助教として加わった。今 裕と久保信之が相繼いで着任、いづれも病理学、横川 定が寄生虫学教授で解剖学を担当した。大正七年（一九一八）台湾総督府医学校に専門学校令による専門部を併置し大正八年（一九一九）には医学専門学校と改称され、内地人（日本人）と台湾人学生を一緒に教育することになった。

医学専門学校の初代教授、基礎医学では解剖学に京都帝国大学助手の安達島次が一九一九年に医専嘱託講師、同年教授に就任した。引き続き大正十一年（一九二二）に津崎孝道が解剖学の教授に就任したが在勤が短く、僅か数ヶ月で京城医学専門学校に転勤、台湾を去った。その後、台北医学専門学校解剖学教室には大正十三年（一九二四）に杉山九一が教授、昭和四年（一九二九）に今井倭武が助手として解剖学教室に勤務した。

昭和十一年（一九三六）一月台北帝国大学に医学部が新設され、教授はまず基礎学科から定められた。解剖学教室に二講座が設けられた。第一講座に東京帝国大学助教教授森 於菟、第二講座に京都帝国大学助教教授金関丈夫が担当することに

なり、中山知雄と忽那将愛が夫々第一と第二講座の助教授になった。台北帝大設立と共に台北医専が帝大附属医学専門部になり、安達島次と杉山九一が専門部の教授に、今井倭武が帝大医学部助手兼附属医学専門部の助教授になった。

森、金関両先生共新進の少壮学者で赴任早々台北帝大解剖学教室作りに心血を注ぎ、僅か数年で解剖学界で名声を上げた。台北帝大医学部設立の四年目即ち昭和十五年(一九四〇)に日本解剖学会第四十八回総会が台北帝国大学医学部解剖学教室の主催で台北帝国大学医学部大講堂で催された。森於菟教授が総会会頭、金関丈夫と安達島次両教授が副会頭、忽那将愛と中山知雄が総幹事を務めた。

八月一日から三日間、日本内地、朝鮮、満洲から多数の解剖学者の参加のもと、盛大に行われた。岡本規矩男(金沢医大)、移川子之蔵(台北帝大)両教授が特別講演、そして解剖学会会員の九十にのぼる研究論文が発表され、会后参加者が三班にわかれて島内観光、台湾での最初で、しかも最後の解剖学会総会が円満に幕を閉じた。森於菟教授の尊父明治の大文豪森鷗外が余りにも有名であった。森於菟先生は温厚の学者で人望があり、昭和十四年(一九三九)台北帝大医学部長に選ばれ、任期二年の医学部長を二度もつとめた。しかも二度目の部長任期中に終戦を迎えた。先生は台湾の解剖学教育と研究だけではなく、医学教育の最高責任者として大きく貢献した。一九四七年に帰国、東邦医大教授、東邦大医学部部長を経て、一九六一年定年、名誉教授になった。金関丈夫教授は名著『人類起源論』で名が知られ、若い頃から不世出だと云われ、博学の先生は人類学、民俗学、考古学、民族学、歴史、文学など学問の世界が広く、これらの学問領域を一炉にした先生独自の研究方法で所謂「金関学」を育て上げた。一九三六年に着任、台湾在勤十三年、終戦後も台湾に留まり、発掘と調査をして後進の指導にあたった。先生の研究生生活の重要部分として「台湾人体質人類学の研究」に大きな足跡を残した。台湾全島と周辺地区をくまなく歩き、発掘と調査をつづけた。そのとき集めたほう大な骨標本が今でも台湾大学解剖学の標本館によく整理され、大事に保存されている。

先生は一九四九年日本に帰国、九州大学、鳥取大、山口県立医大解剖学教室を経て、帝塚山大学で一九六四年に定年

を迎えた。先生の第二の研究の頂点は「日本民族起源論」への挑戦で山口県土井の浜の弥生人骨の発掘が余りにも有名であった。先生が唱えた「渡来説」が人類学界に大きな波紋を引きおこした。

一九九九年に台湾総督府医学校の創立で基礎学科の一つとして解剖学の教育が始まって以来、丁度一〇〇年になる。今では医学教育が普及し、台湾全島に医科大学が十ヶ所、解剖学者も一〇〇人以上教育と研究に活躍しているが、森、金関両教授を中心に先輩たちの台湾解剖学の発展への時代的貢献が大きかった。

(台中市 中国医薬学院解剖学科教授)